

プログラム・ノート

寺西基之

レスピーギ：『ドリア旋法の弦楽四重奏曲』

オットリーノ・レスピーギ(1879～1936)はイタリアの作曲家で、近代イタリアの新しい音楽の流れを作り出す一方、古い音楽の探求にも力を入れ、その成果を取り入れた作品も数多く作曲した。1924年に書かれた『ドリア旋法の弦楽四重奏曲』は題名から窺い知れるように、中世聖歌に用いられたドリア旋法を取り入れて、古い旋法と近代的な響きが融合する独自の音世界を追求した作品だ。曲は単一楽章。伝統的な4楽章構成に通じるスケルツォの部分や緩徐部分が組み込まれているものの、全体は冒頭ユニゾンで力強く示される旋法主題を核にして、起伏と変化に富むひとつの流れのうちに運ばれていく。

ヤナーチェク：弦楽四重奏曲第1番「クロイツェル・ソナタ」

モラヴィア(チェコの東部地方)の作曲家レオシュ・ヤナーチェク(1854～1928)は民謡の研究をもとに、西欧的な音楽語法にこだわらない独自の民族的な作風を追求した。1923年作のこの作品は、ロシアの文豪トルストイの小説『クロイツェル・ソナタ』から受けた靈感に基づいて書かれている。この小説は、人妻があるヴァイオリニストとベートーヴェンの「クロイツェル・ソナタ」を共演したのをきっかけに恋に陥り、嫉妬に駆られた夫が妻を殺害する物語で、ヤナーチェクはそうした悲劇を独自の視点から先鋭な響きと大胆な音楽語法で表現している。全体は4楽章構成だが、伝統的なスタイルとは程遠く、いずれの楽章も速度や拍子が頻繁に変化する自由な形式をとり、第1楽章の冒頭に現れる基本楽想が全曲を纏める役割を果たす。劇的な身振り^{まよ}と激しい表出力に満ちた個性的な作品である。

メンデルスゾーン：弦楽八重奏曲 変ホ長調 作品20

フェリックス・メンデルスゾーン(1809～47)は早くから楽才を発揮したことで知られる。この弦楽八重奏曲も1825年、弱冠16歳の時に書かれた作品だ(1832年に改訂)。通常の弦楽四重奏を2つ合わせた8つの弦楽器による厚みあるシンフォニックな響きを生かす一方、室内乐的なデリケートな絡みも随所に生かされており、そのような幅のある多様な表現がロマン派らしい幻想的な味わいを生み出している。第1楽章の壮大な広がり、第2楽章の深みのある情感表現、スケルツォ楽章の妖精の舞うような幻想的な軽やかさ、自由なフーガ^{ほとぼし}で発展するフィナーレの力強さなど、若きメンデルスゾーンの才気が迸り出た傑作である。

(てらにし もとゆき・音楽評論)